

# 小兒期に於ける急性傳染病の

## 罹病時期と罹病年齢について

長 竹 正 春  
大 森 晶 子

幼兒の性格や文化についての研究は、相當進んでいる様であるが、身體に關する研究は、左程研究に専念されていない現状の様に感ぜられる。

幼兒の身體に障礙を起し易い大きな原因の一つとして急性傳染病があげられる。公衆衛生が未だ餘り發達していない今日、我が國の幼兒達は、この急性傳染病の脅威を受けていると云わねばならない。幼兒を指導し、これを取扱う人達にとつては、この急性傳染病の一つ一つが、どの位の年齢に多く、又一年の中で、どんな時期に、その流行を見る事が多いかを知つてゐる事は、これを豫防する上に、誠に意義深いものと思われるのである。

従來、發表されている急性傳染病の中、所謂、非法定傳染病の統計をみると、小學校兒童を對象として爲されたものが多い。

小學校を對象にしたものを基準にして統計を取ると、その

既往症の調査について、多少問題が残ると思われる。その一つは、記憶に基づくものであつて、記憶の不正確さという點があげられると思う。他の一つは、六年生の既往症においては、乳幼兒期の他に一年生時代から五年生時代迄のものが入るのに、三年生の既往症においては、僅かに、その一年及び二年生時代の既往症が含まれるに過ぎない。従つて、學級の下になる程、その既往症の密度が大きいという不平等な點があげられるのである。

私達は、秋田、鈴木、岸、三人の協力を得て、昭和四年から、十九年迄の間に、東京警察病院の小兒科を訪れた外來患者五萬六千人餘りの中から、百日咳、麻疹、赤痢、水痘、猩紅熱、デフテリア、及び腸チフスの患兒五千餘名について、罹病年齢、罹病時期を調べて、みたので、その結果を簡單に御報告申上げる事とする。

總體的にみると、百日咳が一番多く、これに次いで、麻

疹、赤痢、水痘、猩紅熱、デフテリヤ、及び腸チフスの順になつて居る。

これらの傳染病を、それ／＼の病氣毎に度数分布と百分率にして、罹病年令をしらべて見ると、これらの病氣の中、百日咳は、大體滿二年迄の子供に多く、その後、漸時減少する傾向を見せて居る。麻疹と水痘は、滿一年から二年迄の子供に多く、その後漸時減少している。赤痢とデフテリヤは滿二年から三年迄の間が最高を示し、猩紅熱は、滿四年から五年の間が最高となつて居る。チフスは確定的な事は申せないが、年令が長ずるに従つて多い様に思われる。

この罹病年令に差がある主な理由としては、それ／＼の傳染病によつて、先天性免疫の程度が、違ふという事が挙げられると思う。例へば麻疹に對する免疫體の方が、百日咳に對する免疫體よりも生後長い間、發病を免れる事が出来る位のもとの量を母體から得ているのである。次に罹病時期について、各月毎に、度数分布と百分率を見ると、百日咳は七月、麻疹は五月、赤痢は七月から九月、水痘は一月、猩紅熱は五月と十月、デフテリヤは十一月、腸チフスは、先づ八月が最も多い様に見受けられる。

この罹病時期に差がある主な理由としては、それ／＼の病原菌が力を得るのに適當な環境と身體の條件の不利、例へば夏は胃や腸、冬は鼻や咽喉が悪くなり易いという様な事が、考へられる。

罹病年令については、外國でも、大體同様な結果が出て居る

が、罹病時期については、我が國の報告に於ても多少食い違ひがあるばかりではなく、時ならぬ時期に流行を見る事もある。

この罹病年令からみると、他のこれらの急性傳染病が、乳幼児に多い事は、これらの年令の子供を取扱う人達に取つて、殊更、關心を深める必要があると考へられると同時に、この急性傳染病が、どういふ時期に多く發生するかを知つて、その流行期を迎える前に、適當な豫防措置を講ずれば、幾多の幼児を、その禍いから救ふ事が出来るかと考へる。

豫防措置としては、體力を増強したり、傳染徑路に氣をつける他に、デフテリヤや、猩紅熱に對しては、アナトキシン、赤痢、腸チフス、百日咳に對しては、ワクチンを流行期を迎える一、二ヶ月以前に豫防接種しておくのが好いと思う。麻疹や水痘に就いては、色々、研究されて居るが、未だ確定的なものはない。アナトキシンやワクチンにしても、これを接種すれば決して罹らないで済むというものでもないが、豫防接種をしてこれらの病氣に關心を持たせる事が、より大切かと考へられる。

以上誠に、小さな調査ではあるが、幼児の幸福な生活の爲に努力していただける皆様方に、私共の立場からの一面を御報告申し上げて、御批判と御考慮を乞おうと考へた次第である。

(十五頁より) られていた傾があつた、もつと眞劍な態度でとり上げて、眞に幼児の魂の糧とすることを心から祈る次第である。